

ようこそ

読書の森へ

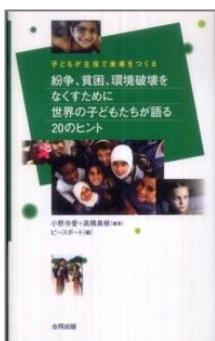
2014年PDF版(2014年7月18日発行)

発行：東洋英和女学院大学図書館

Email: libweb@toyoeiwa.ac.jp

[表紙画像をクリックして頂くと、BookWeb商品詳細（あらすじ、目次など）をご覧頂けます。](#)

「図書館オリエンテーション in フレッシュマンセミナー」で、提出されたブックレポート課題のなかから、優れた推薦文をご本人の許可のもと掲載させていただきます。



小野寺愛、高橋真樹編著『子どもが主役で未来をつくる紛争、貧困、環境破壊をなくすために世界の子どもたちが語る20のヒント』(合同出版, 2011.3)

水道水を飲む、電気をつけて本を読む、おしゃれをする、コンビニでお菓子を買う。これらすべてが急に失われたとき、私たちはどこまで対応できるだろうか？想像もできないだろうが、これは世界のどこかで起きている紛れもない事実だ。平和ボケしている私たちに、現地の子どもたちは「強く生きるためのヒント」を教えてくれるだろう。

(国際コミュニケーション1年 渋谷 理佳さん)



西川由紀子著『子どもの思いにこころをよせて：〇、一、二歳児の発達』(かもがわ出版, 2003.8)

子どもの相手をするということは、ただ一緒に遊んでいるだけではありません。子どもが泣いたり笑ったりする動作を観察し、その気持ちを理解してあげて、初めて子どもと心が通じ合うのだと思います。一緒に遊びながら子どもとの関わりを深めたり、保育者として子どもの発達を手助けするためにも、とても役に立つと思います。

(保育子ども学科1年 山本文奈さん)



あさのあつこ著『金色の野辺に唄う』(小学館, 2008.6)

私たちは「死」についてどのように捉えているだろうか。この本では、悲しいだけではない人の温かみを感じることで「死」に出会うことができる。どんな穏やかな人でも心に闇をかかえている。人は他人の本質を理解したりしなかったりして一生生きていくものだと思わされる。人とのつながりは時に切なく、悲しいものであるが、この本では美しい風景描写と色彩表現とともに、決して暗すぎない「死」が心に温かみを感じさせる。

(保育子ども学科1年 A.Iさん)



岩井恭平著；細田守原作『サマーウォーズ』(角川書店,2009.7)

親戚一同が力を合わせ、知恵を出し合い、インターネットと戦うところが面白い。インターネットの暴走が止められず、みんなの心がバラバラになってしまったとき、祖母の栄の遺書が見つかる。その祖母の言葉にみんなの気持ちがひとつになり、敵を倒すことに成功した。祖母の遺言とはいったいどのようなものだったのか。現代のインターネット社会と昔ながらの家族の愛、絆が融合された、心温まる物語なのでぜひ読んでみてください。

(保育子ども学科 1年 錦織 里菜さん)



松浦玲著『新選組』(岩波書店, 2003.9)

誰しも新選組という名前は聞いたことがあるだろう。では新選組がどのように生まれ、どのような志を持ち、激動する時代を駆け抜けたかを知っているだろうか。本物の武士となるべく江戸から京都へ向かい、粛清を繰り返してでも国に報いるために信念を貫いてきた。しかし、時代が彼らを国を守る臣下から、国の反逆者および敵へと陥れる。

新選組の生き様と誇りを、新選組局長近藤勇の書簡と共に知ってほしいと思う。

(国際コミュニケーション 1年 阪本 真由さん)



姫野カオルコ著『すっぴんは事件か?』(筑摩書房, 2012.9)

筆者の書き方がユニークで楽しく読める上、意外と身近な事柄が取り上げられているため分かりやすい。その多くは女性に関係しており、考えさせられるテーマも少なくない。筆者が遠慮せず素直な言葉で表現しているので、読んでいて爽快な気持ちになること間違いなし。最後の章まで疾走感があり、退屈することなく一気に読める上、少し皮肉な物言いの筆者の言葉に思わず笑ってしまうことだろう。

(国際コミュニケーション 1年 佐藤 文香さん)



辻村深月著『ゼロ、ハチ、ゼロ、ナナ。』(講談社, 2009.9)

「すべての娘は、自分の母親に等しく傷つけられている」母と娘の関係性は家族によって違う。近すぎても遠すぎても駄目で、その関係性に普通も異常もない。

この本は母娘の関係性について深く考えさせられる。

また、登場人物の人間性や抱える問題、女同士のしがらみ、悪意がリアルに描かれている。だがその中に、本当の友情や愛を見ることが出来る物語である。

自分自身と照らして読んでほしいと思う。

(人間科学科 1年 大貫 愛実さん)

No Photo

高村光太郎著『智恵子抄』(新潮社, 2003.11)

この詩集の魅力は、私たちをこの詩の世界へと強く引き込むところである。読むだけで、脳内に豊かに浮かんでくる情景、特に「レモン哀歌」では智恵子のかじったレモンの明るく爽やかな香りまで漂ってくるようだ。人を愛する喜びも、訪れる別れの悲しさも、すべて私たちを惹きつけてやまない。ゆっくりその世界へと旅をしたい、そんなときにぜひ読んでいただきたい一冊だ。
(国際コミュニケーション学科 1年 前島 永美理さん)

No Photo

北社夫著『天井裏の子供たち』より『白毛』(新潮社, 1966)

自分の老いの象徴を発見した時に感じた小さな衝撃と、歩んできた人生に対する誇り。幼い娘に感じる煩わしさと愛おしさ。作者に、1人の人間としての親しみを感じた。作家として生きたい作者は、父から強いられた医者の仕事との葛藤に悩んでいる。カラコルム登山という過酷な体験を経て、生命の輝きに満ちた作者の娘は、なおさらまぶしく映ったのではないだろうか。日常の光と影がこの短編に描かれている。
(国際社会学科 1年 K.Mさん)



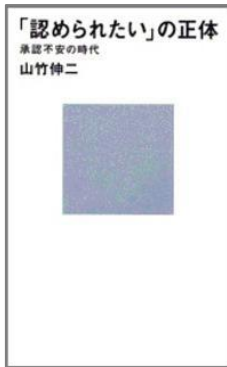
小川洋子著『猫を抱いて象と泳ぐ』(文藝春秋, 2009.1)

ひとつひとつの表現がとても美しく、独特な言葉で語られます。抽象的でファンタジーな言い回しは読書の想像力を掻き立て、この物語の世界へと誘います。チェスの魅力や様々な表情が伝わってくると同時に、チェスについて詳しくないと、ここまでの表現はできないと感じました。主人公は容姿も性格も独特で過去に執着する少年ですが、チェスを通じて成長する姿に感動しました。
(人間科学科 1年 松原 若菜さん)



河添房江著『光源氏が愛した王朝ブランド品』(角川学芸出版, 2008.3)

高校生になって初めて古典作品に触れ、まったく馴染みのない世界に苦手意識を覚える人は少なくない。しかしその作品に登場する人物の地位や、身につけているものがどういったものなのかを知るだけで、よく分からないものが鮮明に頭に浮かびあがるようになる。この本は貴族たちがこぞって手に入れたがり、ステータスになったような品について、作品を交えながら解説をしているため、古典に苦手意識を持つ人にも、読むことをオススメする。
(国際社会学科 1年 西本 伊那さん)



山竹伸二著『「認められたい」の正体：承認不安の時代』（講談社, 2011.3）

誰しも、今まで生きてきた中で「認められたい」と思うことはあるでしょう。その「認められたい」対象は、親であったり、先生であったり、友達だったり人それぞれだと思います。自分が必要とされているのか、受け入れられているのかと不安になるときもあるでしょうが、ありのままの自分の姿を受け入れてくれている人の大切さを改めて感じることができる本です。

（人間科学科 1年 M.M さん）



あさのあつと[著]『ランナー』（幻冬舎, 2010.4）

さわやかな表紙のデザインが気に入り、この本を選びましたが、本編はスポーツ青春ものではなく、碧李の周りの問題や、碧李自身の悩みや葛藤がメインに書かれていて、イメージしていたものと違うと感ずるかもしれません。

しかし、碧李が苦しみ、悩みながらも、再び走ろうとする姿、妹の杏樹のある一言、すべての問題が解決したわけではないけれど、希望のある展開があり、厳しい現実を突きつけられながらも読みごたえのある作品です。

（人間科学科 1年 秋田 涼香さん）

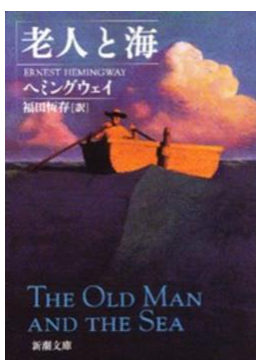


江下雅之著『リンク格差社会：ウェブ新時代の勝ち組と負け組の条件』（毎日コミュニケーションズ, 2007.8）

私たちは毎日のように、便利に Web サイトを使っています。SNS や商品通販サイトを使う人も多くいることでしょう。例えば、商品通販サイトで1つの商品を買うつもりが、次から次へと違う商品を買いたくなってしまうのはなぜでしょうか。

利用者を引きこむために企業側が行っているサイト作りの策略などがこの本では紹介されています。利用者側とサイト運営側、両方の視点でこの本を読むことができるでしょう。

（国際社会学科 1年 平澤 あずささん）



ヘミングウェイ [著]『老人と海』（新潮社, 2003.5）

最初の段階では少年が老人に対して一方的に思いを寄せているようにも感じます。しかし老人は一人での漁を通し、少年の存在の大きさに気がついていきます。最終的には漁師としては結果を残すことができませんが、少年が自分にとって大事な存在と思えたことが今回の漁の収穫だと私は思います。

老人が一人で漁に出て、死にもの狂いで獲物と向き合うところが好きです。

一人で様々な会話を繰り広げていく部分に引き込まれていきます。

（人間科学科 1年 石崎 みなみさん）

※ タイトルの五十音順に掲載しました。